

「絵本の学校」で学んで

「絵本の学校」富士見台分校

牧 純 子

〈初めに〉

「絵本の学校」って、どんな学校でしょうか。ここは絵本を通じて、子供たちのことをもっと知りたいと願っているお母さんたちの学校です。活動の発表というよりも、学校の紹介、私たちと絵本との関わりについてまとめてみたいと思います。

〈開校から現在まで〉

絵本の学校開設に至るいきさつは、4年前、メンバーの一人が、保育園の講演会で、福音館書店編集長斉藤惇夫氏のお話を聞いた時から始まります。

絵本の持つ力に圧倒され、かつ魅了された彼女は、地域の友人たちとの語らいの中から、

①絵本をもっと学びたい。

②子育て中の若い母親たちが聞き、知って（得て）そして話し合う機会がほしい。

そのために、

③地域の中に勉強の場を持ちたい。

と考えました。

そして児童図書専門店の店主で、絵本について、深い見識と広い知識をお持ちの上野俊英氏を訪ね、講師（校長先生）の快諾を得て、仲間を募り、2年前の2月開校となりました。現在では、60～70人のメンバーが、市内4ヶ所（富士見台、中央公民館、神川、川辺）において、毎月1回火曜日に学んでいます。

どこの会場も0～3歳の子供連れのお母さんが多く、気楽に和気合々と、にぎやかな中にも、大変熱心に話を聞いたり、話し合ったりしています。授業はテキストの読み合せを中心に、上野氏の話と絵本の紹介で進められますが、期待に違わぬ内容の濃いもので、私たちは新鮮な感動と充実感に、月一回の学校を心待ちにする程です。

単に絵本の勉強に止まらず、時には個人の価値感、子育てに対する考えもゆさぶられるような真剣な出合いの場面もありました。テキストは、各会場で、下記の本を使用しております。

富士見台自治会館 { 『絵本をみる眼』(松井 直)
『サンタクロースの部屋』(松岡享子)

中央公民館 『絵本とは何か』(松井 直) 『私の絵本論』(松井 直)

神川公民館 『私の絵本論』(松井 直) 『絵本の世界子供の世界』(松岡享子)

川辺児童館 『子育てに絵本を』(山崎 翠)

〈授業の中から〉

日本の代表的な昔話である“ももたろう”を各自持ちよって見たところ、十数冊も出版されており、物話の内容、絵は様々で、その中から良い絵本を選ぶことは大変難しいことだと気がつきました。そしてすぐれた作家や画家について学ぶうちに、良い絵本は、物語に作者の一貫したテーマがあり、選び抜かれた言葉と芸術的な絵とが一致していること、そして子供の発達段階に合わせて与えることが大切であることがわかってきました。

また、ウクライナ民話の“てぶくろ”(福音館書店)という絵本を初めて子供に読んであげたとき、私にはそのおもしろさがわかりませんでした。子供たちはこの絵本が大好きで夢中になって聞いています。テキストで“てぶくろ”の解説を読み、やっとそのすばらしさがわかり、まさに絵本をみる眼が開かれる思いでした。子供たちは大人よりずっと素直にまた鋭く絵本を読みとる力を持ち、物語の中に入りこみ、その世界を楽しんでいるといえるでしょう。さらに毎日の読み聞かせは、親子のスキンシップの場でもあり、本当の手作りの親子の時間を与えてくれ、子育てにおいてとても大切なものだということもわかってきました。

〈メンバーの声〉

この発表に先立ち、各校にお願いしたアンケートの「あなたにとって絵本とは何か」という質問の答えを簡単にまとめてみました。

- 絵本は子供たちの心の世界である。
- いつも傍にいてくれる暖かい大切なお友だち。
- 得体の知れない楽しいおもちゃ。
- 子供たちがすーっと入りこめるもの。

そして、心を大きく広げてくれるものとして、

- 安らぎや夢や優しく素直な心を与えてくれ、美しいもの、不思議なもの、未知の世界を教えてくれるもの。
- 想像力をかきたて、見えないものが見える心を持たせてくれるもの。
- 成長してもいつかよみがえってくる心の財産のようなもの。

各々の親子で、しっかりと絵本のすばらしさを受けとめている様子うかがわれました。

では実際に家庭では、どのように読み聞かせがなされているか、二人のメンバーの事例を紹介します。

H・Kさん(小5・小3・小1)…ドリトルシリーズ、ナルニア国物語等を毎晩読み続けている。

T・Kさん(1才)…“いないいないばあ” “みんなうんち”などを子供の様子をみながら、おもちゃがわりに一緒に遊びながら読んでいる。

母親も疲れているとき、面倒なときもあります。でも、まずお母さんが楽しんで自分のために読む、そんな気持ちも、長続きするコツかもしれませんね。

〈ヤップ島へ英訳絵本を送ったこと〉

このように私たちは絵本のすばらしさを改めて発見することができましたが、そんな折、子供の本世界大会において、「一冊も絵本がありません。一冊でも絵本を送って下さい！」というヤップ島の女性の訴えを耳にしたとき、絵本が氾濫する我国では

考えられないその声に、思わず、いらなくなった本を集めて送ろうと絵本集めを始めました。最終的には、40冊程の絵本を英文タイプし、カンパ金で新しい本を買ってヤップ島に送ることができました。ほんの小さな気軽な気持ちで始めたことですが、ボランティアの意味などについても考えることができ、良い経験となりました。

〈終わりに〉

残念なことです、この頃は、できるだけ早く字を覚えさせ、ひとりで本を読ませようとしたり、テストの点数等目先のことには熱心なお母さんが多いようです。また絵本も商品として、その教育効果をうたわれ、宣伝され、出版されています。でも道具として家庭で絵本が与えられるとしたら何か違っていているような寂しいような気がします。

楽しみ、遊びで十分ではないでしょうか。良い絵本はそこから子供たち、そして大人をも育てていく力を持っているのですから。母親が赤ちゃんに授乳するあの満ち足りたときを大きくなっても与えてくれるのが絵本です。時と心を共有できる喜びも与えてくれます。お母さんももっと絵本を楽しみ、絵本の中で遊びましょう。絵本の学校が、そして今回の発表が、若いお母さんたちや、未来のお母さんたちにとってそんな橋渡しの場になったら、ステキだなと思います。

最後に、英文堂書店の上野俊英氏には、校長先生として、定休日を返上して、御指導いただきましたことを、この場をお借りして、心から御礼を申し上げます。

発表者：小林、小山、関戸、吉野、牧

協力：各絵本の学校

なお、絵本の学校は下記の通り開かれています。

○川辺児童館 毎週第2月曜日 午前10時から

○中央公民館 〃 2 火曜日 〃

○富士見台 〃 3 〃 〃

自治会館

○神川公民館 〃 4 〃 〃